

江戸初期の英文武鑑

ピーター・コーニツキー
アレックスサンドロ・ビアンキ

1 はじめに

慶長一八年（一六二三）に、イギリス東インド会社の帆船クロブ号が平戸で停泊した。年末までに東インド会社の代表者だったジョン・セーリスが徳川家康から日英貿易の朱印状を獲得し、この年イギリス商館を平戸に設立した。イギリス商館は、わずか十年だけの営業活動の後、経営不振のため元和九年（一六二三）に閉鎖された。その十年間は、リチャード・コックスという人物がイギリス東インド会社の日本における代表兼イギリス商館長を務めた。来日する前、コックスは一六〇八年まで五年間ほどフランスで布地貿易に従事していたが、同時にソールズベリー伯爵の秘書

トマス・ウイルソン卿への書簡を通してスペイン関係の政治情報を流していた^①。これはスパイ活動とでもいえよう。彼が東インド会社に就職したきっかけは未詳だが、布地貿易の経験および外国語の知識が決定的要因だったと考えられる。

平戸に着任してからは、イギリス商館の貿易を奨励し、利益をあげることがコックスの任務だったに違いない。しかし、彼は元々読書好きで、日本まで数冊の書物を持参したようで、また部下たちと書籍の交換をしていた^②。このような趣味のコックスが、日本に着いてから江戸初期の出版文化に目を向けたことは何ら不思議なことではない。そのうち、暦、謡本、古活字版の『吾妻鏡』などを入手した^③。イギリス人の日本書籍収集者としては、コックスが、明治時代の有名なアーネスト・サトウの先駆者ともいえ

るが、コックスの場合、日本の書籍を主にイギリス在住の知人へ発送するために入手していたようである。また、コックスは、サトウと違い、ある程度の日本語能力は身につけていたとしても日本語の文章を問題なく解読できたとは考えられない。

一六一四（慶長一九）年二月一〇日にコックスは四通の書簡を書き、イギリス宛に発送した。その四通とも、現在、大英図書館に所蔵されている。そのうちの一通がロバート・セシル¹初代ソールズベリー伯爵宛に送られたものだった。かなり長い書簡で、二点の同封物について次のように書いている。

Herein clozed I send your Lor^d [Lord] a muster or memoriall of the names of most p^rte [part] of the greate princes and lordes of Japan, together wth [with] their yearly revenues rated by a measure of rice called a cokue, w^{ch} [which] is very neare 4 bushells English measure; wherby may be esteemed the mightinesse of this Empire, for here is no mention made of any other sort of comoditie, frutes, grayne for cattll nor minnerales, wherof there is greate abundance of all sortes

日本中の大部分の身分の高い殿様や大名の名前の一覧表、言い換えれば目録、を閣下へ同封してお送りする。名前と一緒にその年間収入も書いてあるが、それは米の「こく（石）」と

いう単位で表現され、一石はイギリスの単位ではおよそ四ブシエル（実は五ブシエル）に相当する。一覧表には、果実や牛用穀物などの商品が収録されていないし、日本に豊富にある多種の鉱物も含まれていないが、（米だけでも）この帝国（日本）がどれほど裕福なのか認識することができる。

続いて、コックスは「一緒に日本の暦もお送りする。これだから（日本人）の印刷様式をご覧になつていただく」と付け加えた。また、同日、ソールズベリー伯爵の秘書トマス・ウイルソン卿へも暦を同封した書簡を発送した⁴。しかし、実は、その二年前の一六二二年にソールズベリー伯爵は既に他界していた。コックスは一六二一年にイギリスを出発したので、当然、伯爵の死亡していたことを知らなかつたのである。

では、これらの一覧表や暦はその後どうなったのだろうか。五年後の一六一九年三月に、トマス・ウイルソン卿が暦一卷および一覧表を国王ジェームズ一世へ転送した。同時にウイルソンは説明書も同封した。ウイルソンの説明書によると、一覧表は「日本の帝王（将軍のこと）の配下の貴族（大名のこと）全員の事情および収益を明記するもので、その大多数が、キリスト教世界のほとんどの殿様の収入に匹敵するかあるいは上回る」という。意外な情報を提供していたのである。国王がその一覧表を見てどう反応

したかというところ、この話は嘘に違いないと批判した。全く興味を持たなかったらしい。⁵⁾

現在、オックスフォード大学のボドリアン図書館に慶長一四年の曆が二冊ほど所蔵されている。いずれもボドリアン図書館配架が一七世紀末期まで確認できるので、おそらくコックスが送ったものだと考えていいだろう。一覧表の方は、これまで現存しないと考えられていたが、二〇二一年に稿者のビアンキが、オックスフォード大学ボドリアン図書館の文書集 MS Ashmole 1787 を調べたときに発見した。従って、本稿の目的は江戸初期の日英関係の新資料としてこの一覧表を紹介し、考察を加えることである。

2 文書集の構成と一覧表の説明書き

上に述べたように、この一覧表は単独した一枚として海を渡って英国にたどり着いたのだが、現在は寄せ集めた文書集と一緒に綴り合せて「MS Ashmole 1787」という綴帳一冊のなかに保存されている。「MS Ashmole 1787」はスクラップブックに近いようなものであり、一覧表のほかに、切り紙や一枚摺などが張り交ぜられた二帖があり、そのほかに中国の書籍が三冊入っている。但し、これは一七世紀に綴り合せたものではない。おそらく一九世紀後半に改装されたものらしい。博物学者エリアス・アシュモル

Elias Ashmole (一六一七〜一六九二) がオックスフォード大学へ寄付した写本類の総目録によると、この「MS Ashmole 1787」は元々紐で結んだ資料を取り合わせ、表紙を付け加えてあったとある。⁶⁾ 仮説に過ぎないが、アシュモルの旧蔵写本がアシュモレン博物館からボドリアン図書館に移された一八六〇年頃に改装されたのであろう。但し、アシュモルがどのように一覧表を入手したのかが残念ながら未詳である。

さて、一覧表は洋紙にペン書きのもので、三七・〇×二四・五センチ(寸法不同)である(図1)。一覧表は片面に書かれているが、裏面には「Revenues of all the Kings of Japon」(日本中の大名の収⁷⁾益)との文章が不明瞭ながら解読できる(図2)。これは、コックスが発送したとき、一覧表が折り畳んであったため、裏面が外になり、そこにタイトルのようなものとして書かれたらしい。その外側の文章は一七世紀のイギリス人の筆跡で書かれていることから、発送したとき、あるいはイギリスに届いたときに書かれたものと思われる。文章が短いので断定はできないが、コックスの筆跡に酷似している。従って、コックスが発送したときに書いた可能性が高いと推測できるのではないだろうか。

一覧表の冒頭に、下記のような説明書きがある(図3)。筆跡は上記の裏側の文章と明らかに異なっており、コックスの筆跡でもない。用紙の中央の上の一部が破損しているが、脱落していると

99

A brief Catalogue or Illustration of the Temples and Sites of the Nobles of Ceylon, as they are now called, in the year 1768, in the Kingdom of Ceylon, as divided into 66.

Cakes.

The number of Cakes, as they are now called, in the Kingdom of Ceylon, as divided into 66.

1	Mattiyadayze Jiggenna Camma.	1302700	51	Yammayakke Sammanoushe.	003500
2	Tannaka cheloungawra Camma.	0302000	52	Coyde Muebera.	0050200
3	Crooclay echehena na Camma.	0490000	53	Camme mousaffere domo.	0038000
4	Nackangawa shewri na Camma.	0070470	54	Coyde yonatto.	0009200
5	Jaxema koozoco n.	0056000	55	Louwe Dewa.	0030000
6	Tammaka Jjona Camma.	0020000	56	Sattakal domo.	0300000
7	Koncolimma sinuano na Camma.	0350000	57	mapahsegen na Camma.	2000000
8	Sammana na Camma.	0116970	58	Paloufema na tray.	0700000
9	Cattoomgona Camma.	0519900	59	Muore domo.	0500000
10	Falshab Ekechena na Camma.	0399599	60	Momgane domo.	0500000
11	Kinnosa yemona tray.	0030000	61	Cattaingona Camma.	0670000
12	Muorevessa na Camma.	0019000	62	Mafamur domo.	0700000
13	Falshab Sanzymon.	0817500	63	Simaffa domo.	0800000
14	Falshab Soymon na tray.	0498200	64	Imza domo.	0060000
15	Shimano Camma.	0374200	65	Arzima domo.	0060000
16	Mattiyadayze Langattano Camma.	0310000	66	Jiggenna Camma Fernando.	0060000
17	Catto Sammanoukher.	0186700	67	Uera Shimana Camma Cavates.	0120000
18	Nachika Jjowoc Camma.	0191500	68	Cowda nuna na Camma.	0120000
19	Mattiyadayze Toghana Camma.	0202600	69	Catta Samma.	0400000
20	Sakawa na Jjowye.	0171000	70	Cowda Jjemo.	0120000
21	Jjowa Sakkeon.	0030070	71	Toto Shimana Camma.	0360000
22	Catto Sayymon.	0040011	72	Mattiyadayze Shimma.	0300000
23	Jaxema na Camma.	0026406			
24	Camma mawus Jjomanana Camma.	0032000			
25	Mangaraha.	0016000			
26	Shimano Sayymon.	0030250			
27	Takkinanga Jjowym.	0050589			
28	Shimano mangafey.	0004700			
29	Shimano mangafey.	0007500			
30	Takkinanga mangafey na Camma.	0016000			
31	Catto fernat.	0030600			
32	Cattoyoga Jjeco.	0004000			
33	Takkinanga Jjowym.	0010000			
34	Jaxema nayhe.	0005000			
35	Jaxema Jjomonates.	0010000			
36	Jjowamma.	0006000			
37	Nannoma Seruko.	0004000			
38	Kimmowates.	0050000			
39	Jaxema dayshoo.	0045700			
40	Langatonal Camma.	0030000			
41	Langatonal Camma.	0030000			
42	Jaxema nimb.	0010000			
43	Cooker Langatta.	0050000			
44	Sadda dayshoo.	0057600			
45	Jiggatatta Lambana Camma.	0012000			
46	Falshabotango na Camma.	0118100			
47	Jaxema Jjowates.	0235200			
48	Jaxema Jjowates.	0192			
49	Jaxema Jjowates.	001			
50	Sacoda Jjowym.	0			

図1 一覧表の表

ボドリアン図書館 © Bodleian Libraries, University of Oxford

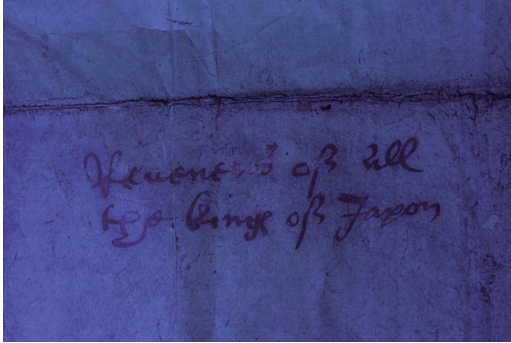


図2 一覧表の裏
ボドリアン図書館

© Bodleian Libraries, University of Oxford

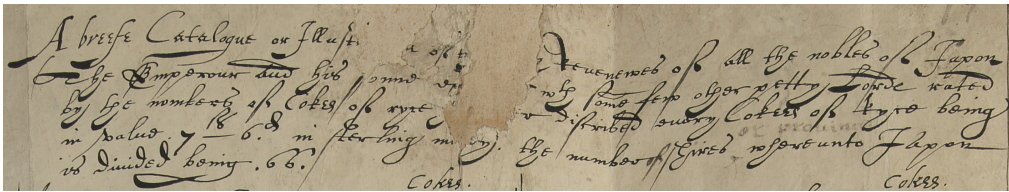


図3 一覧表冒頭部の説明書

ボドリアン図書館 © Bodleian Libraries, University of Oxford

ころは原文の方に「」で現している。まず和訳を示す（括弧の中は筆者注）。

日本の諸侯および帝王（通常「將軍」のことを指す。この場合は大御所家康のこと）と帝王の長男、それからいくつかの二流の領主の収益の目録、または説明。各々、米の石高が明記してある。米一石はイギリスの通貨で七シリング六ペンスに値する。日本は全部で六六カ国からなっている。

（原文：A briefe Catalogue or illust [ratio] n of the [...] Revenues of all the nobles of Japon & the Emperour and his some [...] with some few other petty Lorde [...] rated by the numbers of Cokes of ryze [...] described every Cokes of Ryze being in value 76^d (7 shillings and 6 pence の 76) in sterling money. The number of shires (別筆書入れ 'or provinces') wherunto Japon is divided being 66.)

この説明書きに出てくる米一石の相場については後述する。最後の「日本は全部で六六カ国からなっている」という文章はあまり一覧表と関係がないようだが、説明書きを書いた人物が国々藩と誤解していたのだろうか。一覧表には七二人の大名などが列記してあるが、説明書きが先に書かれたので、その筆者が下に何人

の大名がリストアップされるか知らなかった可能性がある。

3 一覧表の本文

一覧表の本文⇨英文武鑑の方は上記の説明書きと筆跡がかなり違う。本文の方が、イギリス人にとって読みにくいと思われた日本人の名前や官職からなっているので、文字はわざと読みやすいように丁寧に書いてある。おそらくイギリス商館の事務員に書いてもらったのではないかと思われる。原文は各行、アラビア数字の通し番号、人名、石高を表す数字、という順になっている。

以下に示す表では、行ごとに、まず通し番号、原文のローマ字で表記していると思われる日本人の名前や官職、右枠に、推定人物の名前、藩、石高などを明記したり、注を付け加えたりしている。名前、石高などは、特に明記しない限り、『国史大辞典』に依った。

あらかじめ断っておくが、一七世紀初頭の英語のスペルは一貫性が全くない。それに、一覧表に出てくる日本人の名前や官職のローマ字化は出鱈目としかいえない。従って、ローマ字が表記しようとしている名前や官職が必ずしも明瞭ではない。たとえば、2番の場合、「田中筑後の守」というつもりだったと考えて差支えないだろう。しかし、16番の *Mattessodayre Langatta no Canime* の場

合、*Mattessodayre* は明らかに松平のことだが、*Langatta* とは何だろう。当時の在日イギリス人が長崎のことを「*Langasaque*」とローマ字で書いたのと同様に、おそらく長門のことではないかと思われる。また、*Feggen* とはフイジェンの発音の表記で、肥前のことを指しているようだ。但し、50番の *Scotta* など、見当がつかない場合もある。

※表中の略号は以下に示した通りである。

『当代』⇨『当代記』、『史籍雑纂』国書刊行会編・発行、一九一〇～一九一二年、第二巻、一六五頁

『尾陽』⇨『尾陽始君知』、『大日本史料』東京大学史料編纂所編・発行、一九九五年、(覆刻版) 第二編之六、二〇二二～

二〇三五頁

『寛政』⇨『新訂寛政重脩諸家譜』続群書類従完成会編・発行、一九六四～二〇一二年

『藩史』⇨『藩史大事典』木村礎・藤野保・村上直編、雄山閣出版、一九八八～一九九〇年

『三百』⇨『三百藩藩主人名事典』藩主人名事典編纂委員会編、新人物往来社、一九八六～一九八七年

『臣人』⇨『三百藩家臣人名事典』家臣人名事典編纂委員会編、新人物往来社、一九八七～一九八九年

大名一覧表（英文武鑑）

通し番号	人名・官職のローマ字表記	Cokes(石のこと)	推定される人物名及び注
In primis	Mattsedayre figgen na Cammæ.	1302700	松平肥前守 In primis とはラテン語で「最初に」という意味。 前田利長。加賀藩初代藩主。慶長19年5月20日死去。『当代』に「百三万二千七百石」と、『尾陽』に「百三十四万二千五百十石ノ本百三万二千七百石也」とある。
2	Tannaka cheicoungooe na Cammæ.	0302000	田中筑後守 田中忠政。筑後国柳川藩二代藩主。慶長14年に筑後守を称する。『当代』に「三十万二千石」とある。
3	Crooday echchehen na Cammæ.	0490000	黒田越前守 黒田長政。筑前国福岡藩初代藩主。「越前守」とは筑前守のミス。『当代』に「三十一万二千石」と、『尾陽』に「四十万三千石」とあるが、慶長10年の幕府の御前帳の福岡藩石高は498,216石（『寛政』7巻204頁、『藩史』7巻7頁）。
4	Nackangawa shewri na Cammæ.	0070470	中川修理守 中川秀成。豊後国岡藩初代藩主。慶長17年8月14日死去。石高は元和3年まで66,000石。『当代』も『尾陽』も未載（『寛政』5巻28頁、『藩史』7巻464頁）。
5	Farema skooroooco n.	0056000	播磨ひころく 稲葉典通カ。豊後国臼杵藩二代藩主（通称「彦六」）。『当代』に「五万六十五石 稲葉彦六」とある。「skooroooco」と「n.」との間に理由不明の空白がある。また「n.」はラテン語の nomen = 名前の略号だろう。
6	Tannaka Isso na Cammæ.	0020000	田中伊豆守 竹中重利。伊豆守、府内藩初代藩主。『当代』に「二万石 竹中伊豆守」とある。Tannaka とは竹中の聞き違いであろう。
7	Foowlooshimma shinnano na Cammæ.	0350000	ふるしま信濃守 鍋島勝茂カ。肥前国佐賀藩初代藩主。文禄4年に信濃守を称する。『当代』に「三十五万七千石」とある。
8	Shimma na Cammæ.	0116970	志摩守 寺沢広高。志摩守、肥前国唐津藩初代藩主。『当代』に「九万五千石」とある。『尾陽』に「寺沢志摩守広忠（ママ）十二万三千六百八十九石」とある。コックスの書簡および日記に「King of Crates」（唐津王）や「Shimy Dono」あるいは「Semidone」（志摩殿）として見える（※1）（『寛政』11巻42頁、『藩史』7巻166頁）。
9	Cattoo fingo na Cammæ.	0519900	加藤肥後守 加藤忠広。肥後守、肥後国熊本藩二代藩主。『当代』に「五十二万石」とある。 コックスの1622年の書簡に「Catto Samma Dono, King of I.O., per annum 30 mangocas」（加藤様殿、I.O. [肥後のことか] 藩主、年間収入30万石）とある（※2）。61番と同一人物か。
10	Fashbay Echchew na Cammæ.	0399599	羽柴越中守 細川忠興。越中守、豊前国小倉藩初代藩主。天正13年に羽柴の称号を受ける。『当代』に「三十万石」とある。『国史大辞典』によれば小倉藩は当初399,000石。コックスの1622年の書簡に「Yechew Dono, King of Cocora, per annum 34 mangocas」（越中殿、小倉王、年間収入34万石）とある（※3）（『寛政』2巻301頁、『藩史』7巻329頁）。
11	Kinnosta yemon na Tay.	0030000	木下右衛門大夫 木下延俊。右衛門大夫、豊後国日出藩初代藩主。『当代』に「三万石」とある。
12	Mowrree ish na Cammæ.	0019000	毛利伊勢守 毛利高政。伊勢守、豊後国佐伯藩初代藩主。『当代』に「一万九千石」とある。
13	Fasheba Sanseymon.	0817500	羽柴三左衛門 池田輝政。通称は三左衛門で、播磨国姫路藩初代藩主。慶長18年1月25日死去。『当代』に「八十万七千五百石 羽柴三左衛門」とある。ただし、輝政時代の姫路藩石高は520,000石と記録されている（『寛政』5巻44頁、『藩史』5巻536頁）。

通し番号	人名・官職のローマ字表記	Cokes(石のこと)	推定される人物名及び注
14	Fasheba Soymon na Tay.	0498200	羽柴左衛門大夫 福島正則。安芸国広島藩初代藩主。『当代』に「四十九万八千二百石」とある。慶長2年に羽柴姓を拝領。58番と同一人物（『寛政』21巻321頁、『藩史』6巻297頁）。
15	Assana kee no Cammae.	0374200	浅野紀伊守 浅野幸長。紀伊守、紀州藩初代藩主。慶長18年8月25日死去。『当代』に「三十七万四千三百石」とある。
16	Mattessodayre Langatta no Cammae	0310000	松平長門守 毛利秀就。長門守、長州藩初代藩主。『当代』に「二十万石」とあるが、慶長18年に369411石だった。慶長13年に松平長門守を称した（『寛政』10巻245頁、『藩史』6巻351頁）。
17	Catto Sammanowskee.	0186700	加藤左馬助 加藤嘉明。左馬助、伊予松山藩初代藩主。『当代』に「十九万六千六百石」とある。
18	Fachiska Awwa no cammae.	0191500	蜂須賀阿波守 蜂須賀至鎮。阿波守、徳島藩初代藩主。『当代』に「十八万六千七百石」とある。
19	Mattessodayre Toossa na Cammae.	0202600	松平土佐守 山内忠義。土佐守、高知藩二代藩主。『当代』に「二十万二千六百石」とある。
20	Sakkown no Fooyye.	0171800	左近兵衛 未詳。
21	Awwa Sakkown.	0030030	阿波／安房左近 未詳。
22	Cattoo Sayyemon.	0040011	加藤左衛門 加藤貞泰。左衛門尉、伯耆国米子藩二代藩主。当時の米子藩の石高は60,000石（『寛政』13巻15頁）。
23	Taggema na Cammae.	0026406	但馬守 遠藤慶隆。但馬守、美濃国郡上藩初代藩主。慶隆時代の石高は27,000石（『寛政』9巻124頁、『藩史』4巻36頁）。
24	Canna moowre Isoomoo na Camma.	0032000	金森出雲守 金森可重。出雲守、飛騨高山二代藩主。『尾陽』に「三万八千四百二石」とある（『寛政』6巻252頁、『藩史』4巻5頁）。
25	Mangooiche.	0016000	孫市 旗本船越永景（通称孫市）のことか（『寛政』14巻219頁）。
26	Woshema Sayyemon.	0030250	大島左衛門 大島光俊カ。美濃国藩の人、光義の三男、通称は久左衛門。石高は3,200石なので30,250石とあるのは誤記か？（『寛政』2巻98頁、『三百藩』2巻404-405頁）。
27	Tackenanga foyyein.	0050689	徳永法印 徳永寿昌。「台徳院殿御実記」（『徳川実記』、『新訂増補国史体系』1巻468頁）に「徳永法印寿昌」とある。美濃国高須藩初代藩主（慶長17年7月10日没）。石高は50,673石（『藩史』4巻102頁）。
28	Wooshema moofoyey.	0004700	大島茂兵衛 大島光政。通称は茂兵衛。戦国武将で、徳川家に味方し、大坂の陣後、旗本になる。慶長14年に4,710石の黒印を受ける（『寛政』2巻91頁）。
29	Wooshema mangofegee.	0007500	大島孫平次 未詳。『寛政』、『家臣』に該当する人物が登録されていない。

通し番号	人名・官職のローマ字表記	Cokes(石のこと)	推定される人物名及び注
30	Tackeenacka Tango na Camma.	0016000	竹中丹後守 竹中重門カ。丹後守、旗本。正確な石高は未詳だが10,000石足らず(『寛政』6巻303頁)。
31	Catto feenay.	0030600	加藤ひない 未詳。
32	Cattoyozabero.	0004000	加藤与三郎 未詳。
33	Tackcaugey Langatto.	0010000	たかうじ長門 未詳。
34	Farema naykee.	0005000	有馬内記 有馬内記、久留米藩家老。諱・通称未詳(『巨人』7巻73頁)。
35	Fooreewo kemmontee.	0010000	堀尾掃部大夫 堀尾忠晴カ。山城守、出雲国松江藩二代藩主。ただし、当時の松江藩の石高は240,000石(『藩史』6巻73頁)。
36	yewamme.	0006800	石見 未詳。
37	Nannomaa kewko.	0004000	野々山兼綱カ。丹後守、従五位下、腰物奉行(『寛政』2巻359頁)。
38	Kemmowtee.	0050000	掃部大夫 井伊直孝カ。慶長15年から掃部頭。元和元年から近江国彦根藩二代藩主(『寛政』12巻292頁、『藩史』5巻19頁)。
39	Farrema dayshoo.	0045700	有馬／播磨内匠 未詳。
40	Langato na Camma.	0030000	長門守 秋月種長。長門守、日向国高鍋藩初代藩主。慶長19年6月13日没。元禄までの石高は30,000石(『寛政』18巻167頁、『藩史』7巻495頁)。
41	bounee ma Safoye.	0020000	豊後の佐兵衛 大友吉統カ。豊後の戦国大名の一人、従五位下「左兵衛督」を即位。慶長15年没なので、息子の義兼(左兵衛督、慶長17年没)のことか(『寛政』2巻385頁)。
42	Foowrre nimbo.	0010000	堀民部 未詳。『寛政』に江戸初期の民部官職の堀氏が記録されていない。
43	Cookeke Langatta.	0050000	九鬼長門 九鬼守隆。長門守、志摩国鳥羽藩初代藩主。鳥羽藩の石高は元和元年まで55,000石(『寛政』15巻150頁、『藩史』4巻512頁)。
44	Sadda daysheen.	0057600	佐渡だいしん 本多正信。佐渡守、相模国玉縄藩初代藩主。「だいしん」の意味不明。コックスの同僚ウィッカムの書簡(1615年10月23日付)に「Saddo Dono」(佐渡殿)と呼び、また同僚イトンの書簡(1615年2月20日付、ただし、日付は間違っているようだ)に「Sadedon」(佐渡殿)が最近死亡したことを報告する(※4)。本多正信の死亡は元和2年6月7日(1616年7月20日)。正信入府時の玉縄藩の石高は僅か10,000石だったので石高が大幅に違っている(『寛政』11巻29頁)。
45	sigge catta Tamba na camma.	0012000	しげかた丹波守 未詳。

通し番号	人名・官職のローマ字表記	Cokes(石のこと)	推定される人物名及び注
46	Fasheba Tango na camma.	0118100	羽柴丹後守 京極高知。丹後守、丹後国宮津藩初代藩主。高知入府時の石高は123,200石(『寛政』7巻175頁、『藩史』5巻443頁)。
47	Fowrree Feecitates.	0235200	堀常陸カ 『寛政』に堀氏の常陸守が記録されていない。
48	Keeowngoco wacassoo.	0092□□□□ [破損]	京極若狭 京極忠高。若狭守、若狭国小浜藩二代藩主。忠高時代の石高は92,000石。
49	Farema Gemba.	0□01□□□□ [破損]	有馬玄蕃 有馬豊氏。玄蕃頭、丹波国福知山藩初代藩主。福知山藩の石高は80,000石(『寛政』8巻53頁、『藩史』5巻371頁)。
50	Sacoda figgen.	0□6□□□□□ [破損]	さこだ肥前 未詳。
51	Yammazakke Sammanouske.	003500 [ママ]	山崎左馬允 山崎家盛カ。左馬允、因幡国若桜藩初代藩主。慶長19年10月8日没。石高は元和3年まで30,000石(『寛政』7巻249頁、『藩史』6巻46頁)。
52	Cooyde woooukeo.	0050200	小出右京 小出吉英カ。右京、但馬国出石藩主。大和守に叙任され、慶長18年に石高は50,000石(『藩史』5巻475頁)。
53	Camme mossashee donno.	0038000	亀井武蔵殿 亀井茲矩。武蔵守、因幡国鹿野藩初代藩主。慶長17年1月26日死去。鹿野藩は38,000石。慶長17年1月26日没(『寛政』7巻218頁、『藩史』6巻51頁)。
54	Cooyde yamatto.	0009200	小出大和 小出吉政カ。大和守、和泉国岸和田藩二代藩主。慶長18年2月29日死去。ただし、当時の岸和田藩の石高は30,000石(『藩史』5巻286頁)。
55	Towrre dewa.	0030000	鳥居出羽 鳥居忠政カ。陸奥国磐城平藩初代藩主。ただし、忠政の官名は左京亮で、磐城平藩の石高は元和8年まで120,000石(『寛政』9巻294頁、『藩史』1巻199頁)。
56	Sattakee donna.	0380000	佐竹殿 佐竹義宣カ。出羽国秋田藩初代藩主。ただし、秋田藩の表高は200,000石(『寛政』3巻69頁、『藩史』1巻350頁)。
57	Maydash feigen na Camma.	2000000	前田肥前守 前田利長。1番と重複。コックスの1622年の書簡に「Cangano Figen Dono, the Emperour's kinsman, and of the greatest revenues in Japon, per annum 200 mangocas」(加賀の肥前殿、将軍の親戚、日本の中で最高の収入、年間200万石)とある(※5)。
58	Foocowshema na Tey.	0700000	福島大夫 福島正則。14番と重複。
59	Moowre donna.	0500000	毛利殿 毛利秀就カ。長門国萩藩初代藩主。萩藩の石高は慶長15年以降407,803石(『寛政』10巻251頁、『藩史』6巻374頁)。
60	Monngame donna.	0500000	最上殿 最上義光カ。出羽国山形藩初代藩主。山形藩の石高は570,000石(『寛政』2巻133頁、『藩史』1巻466頁)。コックスの1622年の書簡に「Mengamy Dono, King of [空白], per annum 35 mangocas」(最上殿、[空白]藩主、年間収入35万石)とある(※6)。

通し番号	人名・官職のローマ字表記	Cokes(石のこと)	推定される人物名及び注
61	Catta fingo na Cammæ.	0670000	加藤肥後守 9番と重複。
62	Massamme donno.	0700000	政宗殿 伊達政宗。仙台藩初代藩主。寛永11年までの仙台藩の石高は615,000石（『寛政』12巻321頁、『藩史』1巻103頁）。 コックスの1622年の書簡に「Massamoneda Dono, King of Oshew, per annum 70 mangocas」（政宗殿、奥州藩主、年間収入70万石）とある（※7）。
63	Shimasst donno.	0800000	島津殿 島津家久カ。薩摩藩初代藩主。ただし、慶長16-19年の慶長内検によると石高は732,000石（『藩史』7巻540頁）。
64	Omra donno.	0060000	大村殿 大村純頼カ。肥前国大村藩二代藩主。ただし、大村藩の石高は27,973石（『寛政』2巻339頁、『藩史』7巻200頁）。
65	Arreima donno.	0060000	有馬殿 有馬直純カ。日向国延岡藩二代藩主。延岡藩の石高は53,000石（『藩史』7巻481頁）。
66	Fieggen na cammæ Ferando.	0060000	肥前守平戸 松浦鎮信カ。肥前守、肥前国平戸藩初代藩主。平戸藩の石高は63,000石。コックスの書簡や日記に言及が多い。鎮信は慶長19年5月26日死去（『寛政』8巻90頁、『藩史』7巻181頁）。
67	Tera Shima na Cammæ Carates.	0120000	寺志摩守唐津 寺沢広高カ。志摩守、肥前国唐津藩初代藩主。8番と重複（『寛政』11巻42頁、『藩史』7巻166頁）。
68	Cownda mina na Cammæ.	0120000	本多美濃守 本多忠政カ。美濃守、伊勢国桑名藩二代藩主。ただし、桑名藩の石高は元和3年まで100,000石（『寛政』11巻217頁、『藩史』4巻400頁）。
69	Cattsa Sammæ.	0400000	上総様 松平忠輝カ。上総介、越後国高田藩藩主。ただし、当時の高田藩の石高は750,000石。
70	Cownda Issemoo.	0120000	本多出雲 本多忠朝カ。出雲守、上総国大多喜藩二代藩主。ただし、忠朝入府時の大多喜藩の石高は50,000石（『寛政』11巻234頁、『藩史』2巻500頁）。
71	Todo Issemona Cammæ.	0360000	藤堂和泉守 藤堂高虎カ。和泉守、伊勢国津藩初代藩主。ただし、慶長19年の津藩の石高は220,950石（『寛政』14巻283頁、『藩史』4巻456頁）。
72	Mattesdayre Shimmosa.	0300000	松平下総 松平忠明。下総守、伊勢国亀山藩藩主。ただし、亀山藩の石高は慶長15年から元和5年まで50,000石（『寛政』1巻270頁、『藩史』4巻35頁）。

(※1) Anthony Farrington, *The English Factory in Japan, 1613-1623* (The British Library, 1991), pp. 121, 407-408, 410, 413. 東京大学史料編纂所編纂『イギリス商館長日記』東京大学出版会、1978-1982、原文編〈上〉93頁等。

(※2) 前掲 Farrington, p. 916.

(※3) 前掲 Farrington, p. 916.

(※4) 前掲 Farrington, pp. 332, 370.

(※5) 前掲 Farrington, p. 916.

(※6) 前掲 Farrington, p. 916.

(※7) 前掲 Farrington, p. 916.

4 一覧表の特徴

一覧表の本文は人名と石高とからなっている。まず人名を取り上げよう。姓名や官職の表記に一貫性がないことが明らかである。田中筑後守のように、苗字十官位というパターンが多い。しかし、上総様とか薩摩様のように苗字がなかったり、松平下総のように「守」の字が欠けたり、大村殿や有馬殿のように苗字しかなかったり、長門守のように官職しかなかったり、大島茂兵衛のように苗字に通称を付けたり、孫市のように諱しかなかったり、表記がまちまちになっているといわなければならない。それはおそらく情報源が多種多様だったことを物語っているのだろう。

次に、情報の質差が著しい。1番から19番までの部分（以下「第一部」と称する）には、九州や四国の西国大名が圧倒的に多い。それに一人の例外を除くと、全員が慶長一五年の名古屋城普請役を賦課された大名で、その石高も『当代記』の慶長一五年六月三日条に記された石高と一致する。周知の通り、『当代記』は寛永年間に成立したと思われ、『信長公記』や幕府側の書類を再編成した史料である。名古屋城普請の部分は、尾張藩初代藩主徳川義直の伝記である『尾陽始君知』の名古屋城普請の条に酷似しているのので、いずれも幕府側の文書に基づいていると考えてよいだろう。そう

すると、一覧表の第一部に収録されているデータも、情報源が『当代記』のそれとあまり変わりがなく、信頼性が高いといつてよいだろう。

但し、第一部の情報完全に『当代記』や『尾陽始君知』と一致しているわけではない。「竹中」の代わりに「田中」とか、「稲葉」の代わりに「播磨」とか、いくらか名称の誤記が確認できる。また、4番の中川秀成が『当代記』には記載されていない。それから、『当代記』記載の生駒正俊（讃岐国高松藩三代藩主）が一覧表に欠けている。なぜこのようなズレが生じたのかは明らかではない。その問題はさておき、コックスが発送した慶長一九年末の段階までに既に死去していた大名が四人ほど一覧表に確認できるので、一覧表の執筆者が元にした情報源が、中川秀成が死去した慶長一七年八月一四日以前まで遡ることは否めないだろう。いずれにしても、第一部には、何らかの形で名古屋城普請役大名のリストが裏に關わっているようであるが、その実態は今のところ把握しがたい。

一覧表の20番から55番までの部分（以下「第二部」と称する）には、大名などの呼称が単純すぎて識別が困難な事例が多い。識別ができるものには、身分が大名以下で石高が高くないケースもある。いちいち石高が記載されているが、信頼性に乏しいものが相当ある。全体として譜代大名や旗本が第二部の中心といえよう。

最後に、56番から72番までの部分（以下「第三部」と称する）には、第一部の項目との重複がいくつか認められる。それは大名の呼称が同じではないため別人と誤解されてしまったからであろう。第三部では、東国の大名も含まれているが西国の外様が大多数になっている。また、石高がほとんど概数となっているので、他の二部に比べて不正確になっている。結局、第三部については、情報源と情報拾集時期が第一部や第二部とは違っていたことはほぼ間違いないといつてよいだろう。

なお、全体としては、一覧表の説明書きやコックスの書簡の文章にかかわらず、完全な大名リストとは全くいえない。多数の有力大名が一覧表から欠如している。説明書きに「日本の諸侯および帝王（大御所）と帝王の長男、それからいくつかの二流の領主の収益の目録」と書いてあるが、まず大御所の収益は一覧表に見当たらない。それから、尾張名古屋藩、水戸藩、盛岡藩などが収録されておらず、九州の大名もすべてリストアップされているわけではない。逆に、第二部に大名以下の身分の人物がかなり混じっているのも、全体としてバランスが取れていない。なお、原文では、一覧表の右側の方が途中で切れているのはやや不自然に見える。上の事情を考え合わせると、コックスが発送した一覧表が未完だった可能性を否定することはできないだろう。未完成のもの「武鑑」と言っているのが疑問だ。

ついでに、羽柴苗字の大名が四人ほど一覧表に収録されている点について触れておく。元龜四年（一五七三）に秀吉が初めて羽柴を名乗り、その後、秀吉が家族、近親者、親戚、有力大名などに羽柴苗字を授けた。14番の羽柴左衛門大夫II福島正則は慶長二年から元和元年六月まで羽柴を名乗っていた史料が残っているし、『当代記』にも羽柴苗字の大名が三人所載されているので、慶長末の一覧表に羽柴名字の大名が収録されているのは不自然ではないようだ。⁸⁾

さて、石高の表記についてはどうか。石高がアラビア数字で表記してあることは当然のようだが、そのためにはまず、たとえば五万を50,000（五〇千）に換算する必要があった。それは当時のイギリス人にとって必ずしも簡単な演算ではなかったろう。各行に七桁で石高を表記したのは換算演算を容易にするためだったろうか。それでも、計算のミスと思われる数字が少なくない。26番の三千二百五〇石が0030250とされているように、換算ミスも確認できる。

だが、これほど大名の石高の情報がイギリス商館員たちへ流れ、書き留められていたことは何といつても意外である。石高自体が正確に記されている場合が多いことは、情報源の信憑性を裏付けるといえよう。特に三万二百五〇石（26番）や五〇万六百八九石（27番）のような石高数字は精密で驚くばかりだ。多少、一覧表収

録の石高が現在確認できるそれとのずれがある事例は、表高と内高との差のせいかもしれない。ただ、57番の加賀藩の二百万石は誇張であり、町の噂によるようなものだろう。

最後に、一覧表の各行に通し番号がついているが、順番の意味が判明しない。一番の加賀藩の場合、ラテン語の *in primis* とは、「初めに」だけでなく、「最高」という意味もあるので、最初は、一番石高が高い加賀藩をトップにし、あと石高の順番に各大名をリストアップするつもりだったろうか。

5 一覧表の編纂事情

この一覧表は、いつ、まただれによって作成されたのだろうか。コックスがソールズベリー伯爵に発送した一六一四（慶長一九）年二月一〇日までに出来上がっていたことは疑う余地がない。ということは、大坂冬の陣直前の日本を反映しているはずだ。また、一種の武鑑としては、最古の武鑑と見られてきた東京大学所蔵写本『治代普顕記』（寛永一一年序）や寛永二〇年刊『御大名十万石已上付』より以前のものとなる。⁹ この一覧表の作成作業は、イギリス東インド会社が平戸に商館を設立した年以降に始まったと考えるのが常識のようだが、必ずしもそうではないかもしれない。

まず、一覧表が全部一時に書き留められたことはほぼ間違いないと思われるが、だからといってそれぞれの情報が必ずしも一時に集められたわけではないだろう。それを立証するのに、重複している1番と57番を検討する必要がある。1番の方は、「松平肥前守」として前田利長を取り上げ、石高を百三〇万二千七百石とする。それに対し、57番の方は「前田肥前守」の石高を二百万石とする。加賀藩の表高としては両方とも高すぎるが、前者の方は、内高とそう変わらないと考えられる。しかし、後者は大袈裟で、コックスが一六二二年付の書簡に「加賀の肥前殿、將軍の親戚、日本の中で最高の収入、年間二百万石」と書いたところと一致している。この二項目に注目するだけでも、情報源が相違していたことが見てとれるのではないだろうか。また、慶長一九年の時点でまだ有効な情報があれば、藩主が死亡したり、すでに時代遅れになっている情報もある。たとえば、13番の羽柴三左衛門池田輝政は、慶長一八年一月二五日に既に死亡していた。それから、先に説明したように、大名の姓名や官職の表記が一定していないのも情報源が相違していたせいだろう。一覧表所収の情報が数年に亘って色々な情報源から集められた結果ではないだろうか。

クローブ号が日本に到着した慶長一八年以前に、日本に在住していたイギリス人はただ一人、三浦按針IIウィリアム・アダムズのみだった。周知のように、アダムズは家康の外交顧問であり、

二五〇石取りの旗本資格を獲得し、帯刀も許された。アダムズは、日本に到着した慶長五年以降、情報を収集できるような立場にあつたと考えられる。実際、アダムズが一覧表の作成作業に関係していたかという点、確実な証拠がないため、何ともいえない。しかし、情報収集作業が慶長一八年以前まで遡るのなら、アダムズが何かの役割を果たしていたことも考えられるだろう。

では、この一覧表の筆跡は何を物語っているのだろうか。前述のように、三人の筆跡が確認できる。外側はコックスの筆跡のようだが、説明書きおよび一覧表の本文の筆跡が違っている。いずれも、現在残っている文書で確認できるアダムズの筆跡には似ていない。ということは、アダムズは情報収集作業には関係していなかったかも知れないが、一覧表の筆者ではなかったのだ。では、筆者は誰だつたらうか。現在、大英図書館にイギリス商館の関係者の書簡、報告書などがいくつか所蔵されている。一覧表の上方の説明書きの右寄りの筆跡は、どうもテンペスト・ピーコック (Tempest Peacock) の筆跡に似通っている。ピーコックは一六一三年に、イギリス東インド会社の代表者ジョン・セーリスおよびアダムズの同伴者として、駿府や江戸へ旅行し、徳川家康および徳川秀忠に謁見した。その後、一六一四年に離日し、同年に現在のベトナムの海岸で殺されたらしい。従って、説明書きの文章がピーコックの筆跡だとすれば、この部分は遅くとも一六一四年の

一月あたりまでに出来上がっていたことになる。

一方、一覧表の下方の本文は筆跡がまた違う。その部分はピーコックが説明書きを執筆したのちに書き留められたのだろう。その「のち」は、同日のことか、それとも数カ月後のことかは不明である。発送する直前まで情報収集が続いていたのかもしれない。既に書いたように、未完のまま発送された可能性もある。

セーリスが一六一三年二月五日に離日したときに、一覧表を持って帰らなかったということは事実だ。それは一覧表がまだ出来上がっていないことを示唆するのではないか。コックスが一覧表を発送したのはセーリスが離日してまる一年がたつてからのことだ。ということは、一覧表作成の最終段階は一六一四年に行われたようである。コックスが外側に書いた文章を考慮に入れると、数人のイギリス人が情報収集を担当していた可能性が高いが、最終の責任者はコックスだつたのではないだろうか。

6 問題点

一覧表の情報の中で、一番大切なのは姓名や官職でなく、石高の方だつたに違いない。なぜならば、トマス・ウイルソン卿が説明したように、「その大多数が、キリスト教世界のほとんどの殿様の収入に匹敵するかあるいは上回るのだ」という事実を立証する

データのはずだったからである。では、その石高データは確かにウイルソンの言葉を裏付けるのだろうか。

右端の石高表記の欄の *okes* とは「こく(石)」の英語式の複数形と思われる。説明書きに「米一石はイギリスの通貨で七シリング六ペンスに値する」という文章がある。当時は、一ポンドが二〇シリング、一シリングが一二ペンスだったので、七シリング六ペンスとは一ポンドの三分の一強だった。そうだとすれば、この相場を頼りにして、例えば2番の田中筑後守の石高三〇万二千石を換算すると、一二〇〇ポンドとなる。現在の通貨に換算するのは用意ではないが、イギリス国立公文書館の古今通貨変換ツールによると、現在のイギリスの通貨は一七世紀初頭のそのの一三七倍に相当するようだ。¹⁰⁾ それが妥当なら、田中筑後守の石高は現在の価値にしておよそ一六四万四千ポンド(およそ二億七千万円)に相当すると思われる。田中筑後守の石高が実際それぐらいの価値があった可能性があるのだろうか。そうでなければ換算相場が間違っていることになる。因みに、当時のイギリスでは、例のロバート・セシルⅡ初代ソールズベリー伯爵が全国で収入が一番高かった人物だったと思われる。彼の年間収入は田中筑後守と変わらない。¹¹⁾ 但し、当然ながら、大名領地の石高とイギリス個人の収入とは基本的に区別する必要があるが、そのことをコックスたちはじゅうぶん理解していなかったようである。

では、当時のイギリスにおける小麦の相場を念頭に置き、話を進めていきたい。一七世紀初頭の小麦の相場は一ブシエルの値段が四〜五シリング前後だった。¹²⁾ 米穀の場合、一石が五ブシエルに匹敵するので、上記の一石七シリング六ペンスを五で割ると、米一ブシエルの価値が一シリング六ペンスで、つまり小麦の相場の三分の一となる。そんなことはありうるのだろうか。結局、説明書きに出てくる米一石とイギリスの通貨との相場が間違っていたことを認めざるをえない。その間違った相場は一体どこから来たのだろうか。

実は、八年後の一六二二年二月一日に、コックスは、イギリスにいるジョン・セーリス宛に書いた書簡で、大幅に違った相場を紹介している。その書簡では、九人の大名の収入が報告されていた。最初に加賀藩主のことが書いてあり、その収入が二百 *mangocas* (万石のこと) になっている。G・セーリスの計算では、それはイギリスの通貨で一八七万五千ポンドに相当するとコックスが付け加える。¹³⁾

G・セーリスとはジョージ・セーリスのことでセーリスの弟である。一六一四年の段階ではまだイギリス在住だったが、四年後の一六一八年には既に長崎にいたので、東インド会社の社員になっていたようだ。¹⁴⁾ おそらく日本滞在中の仕事の関係で、通貨を換算するぐらいの知識はあったのだろう。コックスの書簡による

と、G・セーリス計算の相場は一石〇一ポンド強で、一覧表の説明書きの相場と大幅に違う（三倍弱）。それは計算基盤が変わったのか、それとも米一石の相場の値上がり（慶長一八年一六〇一九銀匁、元和八年二七〇三六銀匁⁵⁵）を反映した結果なのかが明確ではない。

7 終わりに

最後に、この一覧表が何のために作られたのかを考えてみたい。まず宛先がイギリス東インド会社の幹部ではなく、ソールズベリー伯爵になつていたことはどういう意味をもつのだろうか。前に説明したように、ソールズベリー伯爵の死亡のニュースはまだコックスに届いていなかったため、コックスは、ソールズベリー伯爵が相変わらず国王秘書長官（Secretary of State、首相に匹敵する）と大蔵卿（Lord High Treasurer、大蔵大臣）を兼任し、イギリスの国政を牛耳っていると考えていたに違いない。したがって、コックスは会社の利益だけでなく、国益も考えていたようである。コックスの国益優先思想を反映していたかのように、ソールズベリー伯爵の秘書トマス・ウイルソン卿が国王に一覧表を転送したとき、「大名の）大多数が、キリスト教世界のほとんどの殿様の収入に匹敵するかあるいは上回る」という説明を書いた。つまり一覧表

を通して、イギリスの支配階級に日本の経済事情を紹介し、特に日本が豊かな国だと説明しようとしていたのではないだろうか。それがうまくいけば、イギリス側が、貿易のパートナーとして日本が適切な国だということを認め、コックスが担当していた日英貿易がますます盛んになるはずだった。

残念ながら、コックスおよびその部下たちが苦勞して情報を集め、せっかくローマ字武鑑のような貴重な文書を作成したにもかかわらず、その苦勞は無駄に終わってしまった。ソールズベリー伯爵は既に死亡していたし、国王が目を通したとき、信憑性がなうと言つて無視してしまつたのだ。ところが、幸いなことに、一覧表は廃棄されなかつた。トマス・ウイルソン卿は一六二九年に死亡したが、数十年後の一六八三年にエリアス・アシユモルがオックスフォードのアシユモレアン博物館に寄贈した。そして最後に、一八六〇年にアシユモレアン博物館からポドリアン図書館へ一覧表は移譲され、二〇二一年までそこで眠つていた。

この一覧表は我々に何を物語つているのだろうか。まずは、イギリス商館の情報収集活動を垣間見せてくれる。意外なことに、その情報収集の目的は会社の目先の営利よりも、むしろイギリスと日本との貿易活動全般を強化する希望に基づいていた。さらに、イギリス東インド会社の日本滞在商館員たちが、日本は裕福な国だという印象を受けていたことを示している。それは石高を収入

と誤解したり、間違った換算レートで計算したりした結果なので、イギリス国王が信じがたいと判断したのは正しかった。

付記

資料解明の関係で藤井讓治氏に、また本稿の文章を推敲して下さいた櫻木晋一氏に大変お世話になった。記してお礼のしるしとしたい。

注

- (1) コックスの来日以前のスバイ活動については Derek Massarella, 'The Early Career of Richard Cocks (1566–1624)', *Head of the English East India Company's Factory in Japan (1613–1623)*, *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, vol. 20 (1985), pp. 1–46.
- (2) Anthony Farrington, *The English Factory in Japan, 1613–1623* (The British Library, 1991), pp. 174, 538, 619, 983. 本書にコックスの現存書簡などが全て翻刻されている。
- (3) ビーター・コーニツキー『海を渡った日本書籍——ヨーロッパへ、そして幕末・明治のロンドンで』平凡社、二〇一八、一〇〇～二二頁。
- (4) 前掲 Farrington, pp. 259–265.
- (5) 前掲 Farrington, p. 753.
- (6) William Henry Black, *A Descriptive, Analytical, and Critical Catalogue of the Manuscripts Bequeathed unto the University of Oxford by Elias Ashmole, Esq., M.D., F.R.S., Windsor Herald, also of some additional MSS. contributed by Kingsley, Lloyd, Borlase, and others* (Oxford University Press, 1885), p. 1491.

(7) 当時のイギリス人の日本関係文章ではたいてい大名のことを「king」と言っていた。前掲 Farrington, p. 916.

(8) 黒田基樹「慶長期大名の氏姓と官位」『近世初期大名の身分秩序と文書』戎光祥出版、二〇一七、および同著『羽柴を名乗った人々』角川新書、二〇一六、一一二～一一四、二五三～二五五頁などを参照されたい。

(9) 藤實久美子『武鑑出版と近世社会』東洋書林、一九九九、一二、四六頁。

(10) <https://www.nationalarchives.gov.uk/currency-converter/#currency-result>.

(11) David Loades, *The Cocks: privilege and power behind the throne* (The National Archives, 2007), p. 229.

(12) Gregory Clark, 'The Price History of English Agriculture, 1209–1914', *Research in Economic History* 22 (Emerald Group Publishing Limited, 2004), pp. 41–123 ([https://doi.org/10.1016/S0363-3268\(04\)22002-X](https://doi.org/10.1016/S0363-3268(04)22002-X)).

(13) 前掲 Farrington, p. 916.

(14) Noel Sainsbury, ed., *Calendar of State Papers, Colonial Series, East Indies, China and Japan*, vol. 2, 1513–1616 (HMSO, 1864), p. 290, no. 715, 21 April 1614.

東京大学史料編纂所編纂『イギリス商館長日記』東京大学出版会、一九七八～一九八二、譯文編〈上〉四三九頁、譯文編〈下〉二七四頁。

(15) データは京都大学近世物価研究会編『15～17世紀における物価変動の研究』読史会、一九六二、による。